

好事家への
敬言告

好事家への報告

イギリスの東海岸にある場所——^{讀るに}

考えて頂きたいのは、^{ハロ}シー^ウだ。

そこは、^{いた}今も、^{いた}新石器時代に^{いた}

^{イギリスの}
^{新石器時代の}

境にあるものと、ひどくちがってはいない。

沼地が南方へかけて、堀で切断され、^{莫大}

なま虫退治^{ドイツ人の小説。村の鍛冶師の自叙傳。}のはじめの

^{北の方に}

上り下りと思ひ出さる。平坦な野原は延びて、

石造りの広原大なる
教令堂のあり、

ヒリス〔石柳村の海木〕の茂りぬの中に、
多々各みこ

まねてゐる。ヒリスばかりではない。
榎ヒメの林、

そとを特れ内地産の、はりえに、だもあつて

いる。

^{へたふがし}蟻アキ臨海地と街。その後方には、
大ま

くて空宇を西吹風の塔をさびえさせ、六つ

の鐘の響きたる音をひびかせる。

^{みす者}は八月の暑い日曜日に鳴る鐘の音を、

實によく記憶してゐる。その時、
^{みす者}たすの連

中は、白い埃っぽい坂道を、
教令堂 ^{ていざい}

そろりそろりと登つてゆくのである。 教習堂

は、鋭かくて急な傾斜面の頂に雲がある

のだ。鐘は、くんと着いた日は、鈍重、極で

とくつよく耳鳴きまをたはむのだ。だが、空気が

やわらかければ、まるでそれだけ澄んで鳴り

わたるのだ。ん。

鉄道線は、くの同じ道に沿って、遠く

のゆきを終點へ走り下つてった。軽快な、白

い風車ふうぐるまが、ちよと驛へ出よとまゐる。 藪

ろにあつた。さうともく一つの風車は、町の

南端へち、^{低い}砂礫の溜りちかいつところ、

てまがもろ一つが、北方の高地^{チのク}にあつた。そ

スリート^{スリート}其岸の屋

くには陽を氣を^{陽を氣を}あふつた、陽氣を赤

煉瓦のコツテージがあつた。……だが、どう

羊草者

——^{羊草者}著書はこれより平凡な^{風物}細氣こまかな描寫

とて、讀者を煩わすの^感感多し？ 事實は、

羊草者

がバシバロウレつて書きはじめると、^銀銀

羊草の先に、これからの風物が群がってくるので

羊草者

ある、^{たか}紙は^紙紙に書きつけよべき

然のものを斟酌したつてりである。だ、

羊草者

は （たは） （たは） だつた。
（筆者） はま、言葉まで描写す

る仕事を、之分果しとはいない。

海と町から歩み去つて、停車場を過ぎると、

道は右方に曲曲折（折）る。それは砂の多い道で鉄

道線路に並行し、まが崎を歩を進めると、

いくらか高い丘へのぼることとなる。左手（今

北へ向けてある）（山） にはヒース

類（山）、右手（海に向つた側）には、（山） 樅の老樹

が帯のようになつてゐる。
（山） 風に （山） 葉を、
てつぱん

はこんもりして、（山） 海邊の老樹 （山）
傾斜をも

つてゐる。讀者が汽車から空際線スカイラインを眺め

と、これらの樹ツは、すぐさま●諸君ニ風の

とい海岸の辺がづきつづあゝこころ、知れ

るむろろ。——で、このうきま丘の頂上の

は、これらの根の樹が、海の方へズーッと

走っている。丘の背背起線の方へ延びていつかの

らた。陸起線の端は、いいエ合な廣さの高さか

地地になつていて、雜草雑草のはええ平坦な野野の

を見おろし、そこも根の差りをあつていよ。

暖かな春の日、くろくに腰をかち差さ、青い海

白の風車や、赤いユツ
テージヤ、輝やかな

緑草や、教舎堂の塔や、
そと南の方にある

遠い圓砲塔を眺めることは、
ほろほろだ快楽

ひあ。

そのゆきつらふらふら、
筆者がはじめのシーバ

ロウをきつたのは少年時代
たつた。筆者、ず

いふん年数を過しては、
筆者のその頃の

あつと近頃とはちがつていふ。
筆者

でもなにかその思ふは、
筆者の胸にとどまつて

いふ、だからその思ふは、
筆者の胸にとどまつて

ここに取りあげてみる、

も、筆者には意味あるものである。

ここに記述する事件は、一つの、ところゝた

話なのである。それはシーバロウからあつと

遠くはそれな場所である、そしてまったく

偶然にも、或る人が読んだ話なのである。

筆者は、みずから進んで、うんまに

心の底まで秘密をさうちあけてくれる、

筆者を信じてくれたのである。

一行アケ

私は、^{全書} どの地方のことかは、^{ともし} 多少知ら

ているんです（と、彼は話しはじめた）。春
 になると、私はゴルフをするための、かきり
 規則通り、シーバロへゆくことにきめたい
 ました。大抵は「^{ペア}能」〔^の旅館〕に、一人の友達
 と——ヘンリー・ロングといふのだが、たぶん
 知つておいでだろう（この言葉は對して、^筆
 者は、^{すこしばかり}可哀なまゝをいふ）——宿泊
 しました。そして私たちは、いつも居間をと
 もにし、寝たのしかつたです。この友達が
 死んで以来、私は、もうそこへ行く気はなく

けりました。そして私は、二人の最後に出の
 けた時に起った、あの特異な事件以来、とて
 のくあそこへ行つたといふおぼへん。
 えは有りませ

一九××年の四月でした。私たちはあそこ

へ出かけたのです。が、偶然、旅館にはあれ
 あれよりけり、ほとんど客がありませんで

した。だから、普通の客間はみぎ、實際がラ
 あきでした。とつと驚いたのは、晝食後、

私たちの居間のドアがスツとあき、一人の若
 い男が、いきなり首をのぞきこまうんとして

しん。

私たちはこの男を注視しつゝ。牙んんか

鬼のような感じの、^{血色のわいら}~~人物~~人物——さうい

髪のと、キヨロンとん目と——だが、不

愉快な人物ではなかつたのである。

「どめんちさうい。ここは実向ではか？」と、

その男が言った時、私たちはムツ^{おろり}りしませ

んでしん。曰ええ、さうですと、ロング^だ

「さうかおたつたか——どつちでといひこと

ですか——答えましん。曰どうぞ、おはつり

たさう。」「曰え、はいつてもいいでせか？」「と、
彼は~~お~~^おわれれよくに言いました。無論だが、

仲間をほしかつて行ったのは、明白でした。そ

して、見たところ^{ものの} ~~物~~ 理窟もわかる^{理窟} の人

物——自分の^全 家族の来歴を、くどくど

話すよくな連中ではない人物——だったので、

私たちは、彼に、まあ、くにしこおいでませ

いと勧めました。

曰あなは、ほかの部屋々々が、ちんだか

ガラんとしているの^で、^驚いたんじゃないで

すか。と、おれが言いました。ええ、と彼はう

なずきました。だがそれは、おたち二人にと

つては実には及ぶがた過ぎることです、といっ

たよるなことを、おれは言いました。ところが

おれが、彼は書物を、読むよるなふりを

します。ロンクはトランプのペーシエンス

遊びをし、おれは手紙を書いていた。

ニ三人たつと、この男は、おれだかおれじも

いそおそあしつゝことか、おれに

た。で、おれは書くことをやめ、振り向いて、

彼を話に誘いこみました。

二人を話さしたかと思いましたが、なにかしや

べつなあと、彼は~~おまじ~~のなりこつちを信

頼するようになりました。可あまは私をひ

どく妻を奴だと思いでしよるな(こんなふ

くは彼は口を切^{りました}。ですがけんとのとこ

ろは、私は^{ショック}受る打撃をこけ^{たの}です。

そこで私は受る元氣をつけた^か酒を勧め、いっ

しよに飲みました。 ^{ウエーター}給仕がはいって来

ました。(ドアの開いた時、この若い男は、病

才にか用があつたが、
絶ち切るようには、
話を

心あかりでもするよるに、びくつとしたよる

でしん。が、給仕かきつてしばらくさると、

彼はまた、不安な様子戻りでのあたりました。ここで

は彼は誰も知つていなくてしん。さうして偶

然私たちと知るよるになつたのでしん(事實

は、町にすこしの知人あつたのですが

彼は、もしあつた氣にさあふたつた、はとん力

言さうしてたたまえいと言いましん。無論私

たちは、是非とか日どろしすうと

か言いましん。リングはランプを押しやり

—ほんの五六マイルも
先でぶー

ました。そして二人は、からだを落さつけて、
どん
後を車に引かされていっただけ、聞き耳を
立てました。

「それは、一週間以上も前（起ったこと
はもうまうのちあ

です。と、彼は口を切りました。曰ええ、私

がフロストンへ教令堂を見物するのめ、自転

車を走らせ時です。その建築は大変興味のあ

るものでした。

その年
その年の廊下を歩くとその年のその年の

その廊下ポーチの一角は、壁合ニッチや楯

で飾られた美しいものでした。私はそれを写

あつにとりまへん。そこへ^{墓地}を掃除してつた^{お前}

^{まへ}のやつて来て、金堂の中を見物したい^のかと

訊きました。ええと答へると、^{お前}は鍵をと

り出して^{お前}を入れてくれました。内部は

大したものではなかつたです。^{お前}は、小

ぢんまりした結構な金堂で、しつゝあつたの

掃除が行き届いてると言いました。だが、

ここで一番すばらしいのは廊下です^{お前}ね。"と、

こう言つたお前、そこへ出て、ちよつどその

廊下のところへ来たお前と、^{お前}はお前に向けて

言います。ああ、それでこの廊下は

法祖の物で、^{かき}とところで旦那、あそこにある

武器の紋章の、どろろの意味の保存

い、^{かき}？——その紋章は、三つの王冠

を、^{かき}というのでした。私は紋章学からして

は、^{かき}のくべつ知ってはいませんが、^{かき}は東

アングリア^{王國}の^{右代英國}の、古い武器だと思^{われまうね}

ということはお聞きなれませんか。

「^{かき}の二通りで、^{かき}と、^{かき}は言いました。で、

あの上にある三つの王冠の意味を保存して

もしあれが、
奴等の一人 に對して 保護され

ていたなら、
あの王冠は、
今でもあすこいあつ

たものでござ。
~~ガルマン~~ 人等は、
こゝへ何處とま

くやつて来やした。
思ふままにぬ。
船でやつ

て来て、
男となく女となく子供となく、
~~ガルト~~

の中で殺しつちま ヤカッ たんです。
まあ、
私の話

は、
ほんとはですよ。
ほんとはですとも。
~~ガルト~~ お信い

くださらないなら、
教師さんにびと ~~ガルト~~ まいて

どらんをさい。
~~ガルト~~ おす くに おす かいでなすつた教師さ

んにぬ。

見まわすと、^{ニギ}徑をあさいて来る牧師のあり

ました。氣おすかしげに見えたる老人でした。

私が~~後頭を~~信賴の挨拶をしかけるかしわけ

をいかり、^{ニギ}牧師はひとくポンポンと、言

葉の腰を折りました。牧師は言いました。い

ったいな^にを~~折~~を~~し~~するんだね？ ジョン

「^{ニギ}の^{ニギ}名」。——いや、今日は。あなたはその小

さな教令堂をどうんだっあのどうか？」

そこで私はちよつと話をしめけると、^{ニギ}牧師

さん、~~お氣を~~はおんやかひりませんか、^{ニギ}徑は

まゝお母さんに、~~お~~おまにささるゝいるのだと訊き
まゝさん。

「ええ、ちんでもよいことではさ。わたし

はんだくの おまに、あの ~~お~~尊い王冠のことを、

あなた様におたずねなさるゝゆゑいと、申し

ゆるとくちんでさ。

「ああ、さうかい。」と教師さんは祈に向い

て、

~~おまにささるゝ~~

「~~おまにささるゝ~~ 實際物を ^{ささるゝ} 盗みます。

さうじやありませんか？ だが、あなたは古

い ~~おまに~~ 味をもつておいでなす？ え？

無行一字サケ

「ええ、しつかりき、たつぷりおもしろくて

さ。」「と、お爺さんは言いました。」「このお爺は、

あんなに木のにおっしやることお後、お信じにな

りまてよ。だって、あんなは待自身お家リア

ム・アージヤアを知つておいでなまておいら。

あつ親
笑も子とや。

そこで私は、ひと言、おひその話を聞いた

くんととまゝ口を挿うました。そして向もな

く、私はお爺さんといつしよれ村の通りをあ

らいていまして。お爺は行き会うお爺さんへ

軽く聲をあげ、さうして住居へ着きました。彼は

私を書齋に連れて行きました。道すから牧師

さんは、私に言葉遣い、良俗傳説の例に知的な

興味を持てた。物多き多きあり、^{まったく}普通

漫遊者ではないうことを、認めてくださいました。

い、牧師さんはよろこんで話してくださいました。

^{その}同のさ、^{その}差度水た特殊の傳説は、以前印

刷に阻そくして成功しなかつた事を、私し

る私の方で勤めたほどのものでした。

牧師さんの話はこちらです。——「この地を

には、あの三つの神聖なる王冠に對する信仰が、
 おつとあつたのでせう。昔の人達はこの王冠が、
 デーン人〔古代北方の英
國に侵入する種族。〕や、フランス人や、
 ゲルマン人〔~~等~~の侵入を妨ぐたけに、この海
岸の近くの、
 別々の場所に移められたた
 と言つていたのでせう。さうと言ひ傳へられたと、
 この三つの中の一つは、おつと以前に掘り
 出されてしまひ、もう一つは海水の浸蝕のた
 めに行方知れぬにたり、残る一つが浸入者等
 を防ぐ（雷）の壁を築き、
 壁を築き、
 女が現れしつ

そこに中二の玉冠のあ
 り、私は推定す
 べき

この海岸にはありません。だが、^露そんな遠い

ところでもありません。そして私は、人々が

發掘されたと言っているのは、この玉冠だと信

じているので。ところで、^{場竹を之の}南またくしをい

~~北~~しようが、南の方へ、或はサクソン王

「昔、^{ドイツの北部}の王宮があつた。それは今で

は海中に沈んでいゝと思ふが、どうですか

? ^{以上}二つの玉冠をほみり、言ひ傳

へでは、第三のものは地中に埋もれてゐるの

です。

「その第三の互慰は、どこにあると言いつ

てくれるのではありませんか？」 無論私は訊きまし

た。 ~~お師さん~~ 「ええ、言いつてえ

は、~~い~~のだが、どこにあるとは言わなないので

す。」 ~~お師さん~~ ^{お師さん} のところ ^{お師さん} には、お師さん

~~お師さん~~ ^{お師さん} の ^{お師さん} 代り、お師さん ^{お師さん} を ^{お師さん} 起さ

ないのですね。で、お師さんの代り、私はちよつ

と私を喜ばせて、言いつてました。 「あの爺さんは、

あなた ^か 井リアム・アーリアア ^か という人物

を知つておいてだと言いつてましたが、それはど

たわけでよのね。
王冠は関係でも

ありそうな口ぶりですんが。

「いかにも、それはとろ一つの娘を新で

す。と、お師さんは言いました。」「このア

ジャパー族——義はこの地方では、大

旧家です。だが私は、この一族が果して上流

社会の人だつたか、それとも

たか、
知らるゝとはできませんか——

のアージャパー族の令れは、あの残つ

大取後の王冠の守護者
たつた
と、言

のでした。といふのは、野暮しと夜間歩哨の

ため、彼は肺病になつたからで夢しん。彼

は一族の介れの最後の人でした。その最後の

人だといふ^{考えは}夢しん、彼に^は恐ろしい想ひみでし

た。でもどうもさうなこともできませぬ^{でしん}。彼にな

いふよりも近い親身な人々は、^{ツツメ}美穂氏地にい

ました。私は井リアムについての手紙を、そ

の人々に出して、あつた方一族に對する^{三三三三}美穂

の用事があるから、表てくれるようにと懇願

しましたが、返事はありませんでした。こゝ

井リナム・アーシヤアと名
をしるしん、

たか、^{おそく} ^{おのれ} ^宿 余といつていいものがあり

ました。それは、初め自動車に乗って、もと

の道と教令堂の基地を過ぎた時、^{かすり} 初

かしい一つの基全の用、ふと目についたことな

のでした。無論おはありて、^{自動車} 基全の上の

文字を読みました。"一九××年、シーバロ

ウに於て一死す。享年二十八歳。"としるしとあ

りました。たしかにそうでした。——もし ^正

^{しい根拠といふもの} ^{ある} ^は ^{人の} ^心 ^を ^研 ^究 ^心 ^が ^あ ^っ ^た ^ら ^い ^は ^す ^ぐ ^な ^く

くし思慮のある研究心があったら、すくなく

公家時代の遺物

ことには、その地元のごく近くに、その回令

家をば見しことによろ。ですが私は、自

今の研究の手がかりとする正しい端根根とは

なにかといふこと、^にあつて見当がつきませ

んでした。ところが、^{あつた}まじりそるれ^宿宿舎^宿舎があ

りません。その^宿宿舎は、^宿宿舎、その^宿宿舎にあ

ら、あの骨董屋——^宿宿舎に——に

通りました。私は^宿宿舎で、^宿宿舎、^宿宿舎ある五六の

古本をひっきりみえしと見ました。そして、

お話しするのにもなっています。その一冊は、一七

四の年頃の祈禱書ど、その中に「はみごと

と云う釘でした。——いや、すぐ行って、それ

を持って来ましよう。私の部屋にありまじか

ら。山

と云う長い話を切つて、彼は、あんだかあだ

ふた (と部屋を) 出て行きました。私たち二

人が、ほかの話題に変える。ひまもなく、彼

息をせき

はすぐさま戻つて来て、おれを多分その本を返

フライリフ 飛頁 一本の前後にある を開いた本を返しまし

まよ

くんらんを詩か

た。その日は、震えん手紙で書き書いてあり

全部サテ

おぼやき

まうら。

ナタニエル・アージヤはわが名を

イングランドはわが御土なり。

シーバロウはわが住所なり、

基督はわが救ひなり。

われ死しをササむれば、

わが骨すくへば朽ちにし時、

われの全く忘れ去られし時、

神よ、^{みまわらせ} 自らわが身を救はれし時、
神よ、自らわが身を救はれし時、

この詩は、一七五四年の目附になつていま

した。その頃はアーシヤア家系一家の名が四半
 山記入されていきました。ナタニエル、フレテ
 リック、井リアムといったエ合に。そして一
 九〇〇年の井リアムの名で終つてた。^{しまし}

若い男は言葉をつかげまゝ。

口どうです。誰だつてこの本を見たら、極

上の振り出し物だと言ふでしょう。私もさう

思いました。が、今では逆です。無論私は骨

董屋に、井リアム・アーシヤアのことを尋ねま

した。そして ~~無~~ い事は、彼は井リアム

のこことを思い出しさすれました。井リアムは

この北の原野の田舎家に住んでいて、そこで死

んだといふのでさ。これは私は、~~道義~~^{いい手かか}

りさつけてくれました。私はどの家かそれだ

か知りません。そのあたりには、割合に大き

な田舎家が、唯一軒あつただけでさ。

つぎに私の妻仕事は、このあたりの人妻達

と、知り合ひにあることでした。で、そのつ

もりで私はすな散歩に出ました。一匹の犬が、

この仕事をししてくれました。その犬は ~~犬~~^猫 猫に

新へ喰ってかかったらので、^{村の人々} ~~村の人々~~は近

け出まきし、大を打ちのけなければなりませ

人でしん。^{そして当然の諷} ~~そして当然の諷~~びまふが、そ

れがきつぬけで、あれわれは言葉をおあしま

しん。私はいきなりアー ज्याアという名を持

ちてしました。そして井リアム ^{を知らぬ} ~~を知らぬ~~

るか、或は ^{知つてゐる} ~~知つてゐる~~にかを考える ^{といふ} ~~といふ~~風を

しました。すると一人の婦人が、あんなに若

くて死ぬやんで、どんやん井リアムには此心し

^{いふ} ~~いふ~~たてしよと言ひました。 ^{寒く} ~~寒く~~ ^晩 ~~晩~~

に戶外にいたことが死の原因だつたと、確言

しました。恙多君 すのさお新は、"井リアム

は夜、海上を漕ぎ出しはしよあつた いをの?"

と尋ねると、婦人は、"いいえ、あそこの

ある無樹の生えん へ、いつと 行のれ 塚の上すえよ。"と念

えました。——すぐさま新は、その丘へ行き

まゝへん。

新はこゝへ 塚を 図發掘するところのめけて

は、多少の骨が有りませぬ。新は下部地方で骨

山塚を發掘せんことが有りませぬ。たゞそれは

所有者の許可を得て、自畫公館と、人の助け

でやつたことである。善悪像を善悪像、こんどの

段で私は、鉄を入れた前、非常に注意して

計画をたてました。樹を横切つて掘り立て

ることは不可能でした。樅もみの老木が生えてい

るので、邪鬼まじな木の根が鉄を穿つたろう

と知つたのです。だが、土は非常に軽く、砂

っぽく、自由でした。そこには鬼の穴——或

は、或る種のトンネルネにはひろげられるほど

の穴がありました。合間のホテルへ出入りす

ること、たんだん面倒になりまうた。で、

私は、発掘の方法を思いついた時、手助けし

てくれる人々には、ひと晩の間、専念をやつて

見る。だから私は、^{とまひました}そこをひと晩中いた

のでした。私はひとりごとトンネルを掘りました。

私はかどんまわりのトンネルに支柱を^{ささえ}つけ

たか、まっすぐ掘って後理め立てたかといふ、く

あしい話は、お戻りなかつたやめまこと。

あしい

^{うちの}大事なる^{よそ}は、王冠を手に入れようとしたとい

うことでまわります。

いゝまでとなく、私達は二人とも、読み

と好奇の叫びをあげました。私個人としては、

久しい以前から、レンドルシヤムの王冠の祭

見について、且つその結果が、屢々出た

き運命の陥つたといふ話を知っていました。

話だつて、^{ルンドルシヤム}アングロ・サキソン「英人の」の王冠

といつたものを、^{美事}見た者はあつた ^者 ^今 ^{まで}

す——すくなくとも、^昔昔にもなかつた ^の ^で

した。だが、この若者は、すつかり後悔し

てゐる目で、私達をジツと見つめました。そ

してまいりました。

「ええ、手に入れただけです。そして、どう

にも困っているのは、私か、どうやらその

王冠をもとに返させるか、見当のつかないこと

とです。」

「返えすつて？」私達は叫びました。「君

は、このイギリスで、夢を伺われんこともな

い、最大の驚嘆すべき^見発見をしたのでよ。無

論それは、ロンドン塔の宝物館へ持ち去るべき

ですぬ。あるいは君の困つていつくことでは？」

し君が、^{塚のあ}善悪土地の所有主とか、^谷後掘物とか、

そくしんいろんをことを考慮して、[●]いろのな

ら、僕たちは断乎として君を助けぬきましましよ

う。誰だつて、くろしん^{多勢多勢}の^{多勢多勢}場合、

裁判以迄のを之のと、馬鹿騒ぎしようとする

者はありませんよ。

たぶんおたちは、これ以上は言いません。

か、若者善がしんことは、両手で顔と顔い、

くろつおやいたおけでしん。——口とくろしん

ら玉冠を返せせうか、見えおつおまい。

とうとう、リングが言いました。口失敬な

奴だと思われましようが、許して頂いて、あ

なたは~~王冠~~が王冠を手に入れたいのは、またた

くのことではあか？、
はとりの

私も自~~ら~~合で、これと同じことを聞いた

かったあでした。ど~~う~~にもこの話は、よくよく

考えをみても、狂人の夢々として思えないので

した。だが、私は、この言葉を著者の感情を

傷けようよことは、敢えて口にしませんがし

た。

しかし彼は、ロングの言葉を、十分かんや

かに受けました——実は、絶望のための沈静

とも言いおれましよう。彼は^立寒ぢあかつて言ひ

ました。曰ええ、~~寒~~寒そうひや。脚^口で

はよりません。新はそれをここに~~持~~

~~持~~新の部屋に、^靴靴にしまこんで、持つ

ていたのでよ。あんたら、部屋へおいでて~~靴~~

^{ごらん}くたさい。この部屋へ持つて来る気はな

りません。』

私たちは機会を逸しようとはしませんでした

た。彼について行きました。彼の部屋は、ついに二三番目の先でした。旅館の靴磨きが、

廊下に出るとある靴を集めていました——

いや、そうだとおぼろげに思っただけだが、こ

れは後^{で考えて}、たしかではなかつたのでし

た。

若者——その名はパクストンというのでし

た——は、前よりと嫌な震える様子で、急い

で部屋はいり、私たちを手招きし、^{早く}明り窓

に向き、ドアを念にしまつた。それか

旅行一字サタ

ら彼は旅行靴の錠をあけ、
 ような、きれいなハンカチの束を出し、
 ドの上へのせし、それを解きほぐした。
 くる

私は今、実際のアングロ・サクソンの王冠を、
 夏^{なつ}の目で見たと、言うことができまふ。

それは銀製で——レンドルシヤムの王冠は、
 常に銀製だつたと言ひ傳えられていませう
 が——幾つかの宝石がちりばめられていまし

た。
 カミオ
 浮彫^{ウキゾウ}宝玉でした。そしてむしろ撲^まをほとん
 大部分は古風な凹形^{インタリオ}宝玉と

ど粗雑といつていい細工でした。事實王冠は、

貸貯中の~~素~~^面や寫本の中などで見ると、あ

あしん王冠に似ていました。
理や唐ましのものは、
物身も素直な九世

紀以後のものとは考えられませんでした。
（し）

たいへんな興味を感じ、無論手にとつてそれ

をひっきりかえりて見たいと思ひました。
（田心）

パークストンは遠くなりました。

あつちやいけません。新がやりまじと、

王冠を取りあげ、~~●~~グルグル方向を
彼は意のままにまわす朝意をもつたから

えなから、残る隈なくおたせの検方させん

くれました。 ^口 充分ぐらんになりましたか？

とおしまいれこう言ったので、私たちが ^が ぐや

あきまさと、彼はハンカチで王冠をくるみ、

靴に納めて鍵をかけ、無言のまま立ちあがり

て、私たちに顔をむけました。

口 僕たちの部屋へ帰りましょう。口 ロングは

言いました。口 そして、どんなことが噂の

噂の、話して頂きたいのですよ。口

口 パクストンは感謝しましたか、

^{さきにお}
~~口 僕たちは~~
~~口 彼を~~
~~口 助けた~~

いじにちりますか。見にー海岸が晴れているか
~~口 僕たちは~~
~~口 彼を~~
~~口 助けた~~
~~口 彼を~~
~~口 助けた~~
~~口 彼を~~
~~口 助けた~~
~~口 彼を~~
~~口 助けた~~

か、見

『
』

この機を言母は、いつに、合點のい

めぬものでありませんでした。とらうのは、

結局私たちの ^{（能度）} は、^{いつに} 猜疑的であつたか

らで、しかも旅館は、その言 ^{（と）} つたよりに、

實際かうあつたつたからです。

でも、私たちは、うすうすある事を感じ ^{（し）}

はじめました——それが早んだか、はつきり

言うことはできなかつたといか、神経過敏

といふやうは、感^カ染^シあしやういものでよ。

そこで、私^シたちは部^ブ屋^ウを出^デたのですが、~~ト~~

~~ト~~と肉^{ニク}り^テ、^{まさ}と^まへ^メ目^メを^ヤると、一

つの影^{カゲ}、或^ワは影^{カゲ}以上のものが——喜^キも^ナく——

廊^{ロウ}下^カに出^デる^トい^フる私^シたち^チの前^{マエ}から——

方^{カタ}へ、スー^スツと通^トつて行^イつたよ^うな^キ氣^キがしま

した(私^シもロ^ロン^グも、~~ト~~ニ^ニ人^ニともそ^そう^ウ感^カじ

たのでよ)。

トさあ、よし。

こ^こう^うな^なら^らば私^シたちはパ^パク^クス^スト^トン^ンル^ルさ^さや

いて——なれぬ調子でささやいて——
の左右につま、
私たちの店頭に度りまし
ん。

店頭にはいと、私は、今見た類もない宝

物のため、しばらくはぼんやりするたろと、

覚悟してしまえ。が、パクストーン の度はす

賢れにしろしげな様子をしてゐるのを見て、
私

は御か 賢れの謙かまりか言々出すまで、そのままい

て置きましょう。

「どうすべしでしょうか？」と云うが、パク

ストーン農のはじめの言葉まで一ス。ロングは、

~~無~~ ~~理~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~の~~ ~~は~~、
無^理も^なら^とと
理^がこ^う戸^或い^して^いる^のは、

考え（これは後、~~後~~うとあげてくれんの

びり）ま〜んか、

曰 ~~お~~ ~~か~~ ~~が~~、^なあ^の隊^のあ^る土^地の^所有^者を^是

押さえないのでよ。その人に知らせて——

別行一字リタ

曰おか、そんなこと！、ハクストンは、~~無~~ ~~理~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~の~~ ~~は~~、

二無^フニ ~~無~~ ~~理~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~の~~ ~~は~~、
理^をあ^げて、
曰ごめんなさい。あ

たのい^はたは^切切^でよ。でも、~~無~~ ~~理~~ ~~も~~ ~~な~~ ~~ら~~ ~~と~~ ~~は~~ ~~い~~ ~~ふ~~ ~~の~~ ~~は~~、

あれをもとの端折に返えすとゆきとまうた

じゃありませんか。^{（さうして）}私は夜寝る事もあきらへ

行くとは思いません。といつて書局行くわ

けいもたっぷりです。たつて、^{（さうして）}あきらむかたは、

~~事~~ ^{（おありのな）} ~~事~~ ^{（事実）} ~~も~~ ^{（事実）} 誤解をまゐさうなないので。——よろ

しい。では事実を申しあげますしよ。私は、

この事実の關係を——以来、一人^{（い）}で^{（居）}たこ

とはまゐるので。』

私は、このバクストンの言葉を聞いて、そ

れいのちりばめらしい^{（解釈）}と、胸^{（こ）}んか

へは^{（のけ）}あきらめたのでした。たぶん今は、私の

目を捕まへ、私を割しなから、

口は、わめく言葉と考えまはぬ、たぶ

ん。しめし君がどんな立場にいつのあ、もど

くし明瞭に言つてくれませんか？ — そろ

すれぬ君も気が軽くなりはしませんか？

別行一字リテ

そこでこの事実の全貌が、暴露路さめるこ

とんた^{りまし}な。パクストンは、ガロリと私たち

と見て、とつと傍にまゐるよろれと手振さ^し

そつと低^{こい}聲で話しはじめた。私たちは、無

論一心に耳^またげた。そつとそのあとで、互^あい

此意見と交換しきした。この顛末は私が書き取つ
ておいたついで、パクストンのいつたほんとい一言一句
このままだと信まずするのだから。

彼の話はこうでした。――

何々の事は、私が才一回の試験をした時が

らはじまつたのです、~~それ~~、そして繰り返えし繰り返

返えし、私を追つ捕つたのでした。多量 試

探案にかかると、いつも誰か――一人の男――

が、レミ 梶の森樹のそばに佇んでいるのでした。

それはどうつ書面なのでしたよ。その男は決して

て私の前方には^居いませんでした。私はいつも
 彼を左か右か、^{目尻}で認めました。そして
 彼に振り向いて直視すると、その人は姿が^{女の}
^{いの}男で、~~男~~でした。——私はおいぶん長い間、
 地べたにゴロリと寝ころんで、ほろりと観察
 していましたが、^誰もそんな^居ないことを確か
 めると、すぐ起きあがって^{また}寝掘をほいしました。
 そのうち、もう彼はそんな^居たのでした。
 その上彼は、^ままをまをたのめか、或は事をほのめ
 かすように^片風を吹かせまわるとしたのでした。それ

はこふちんでよ。私が^{ホテル}宿舎の部屋に居る

と、あの骨を筆を置った祈禱書が、とと

に^買置^てま^うと、^おま^まの^手紙^をお^まま^の手^紙に^まま^の手^紙に^まま^の手^紙

いつとテーブルの上の^おま^まの^手紙^を取り出され、あ

のマジヤア家の名の書い^てある^おま^まの^手紙^を ^フラ^イ・^リフ ^アイ^ブ

のところかひらみれ、^おま^まの^手紙^をい^つと^によ^うに^おま^まの^手紙^を

刀をその上^に横^にし^てあ^らわ^せた^らし^ん。 ^おま^まの^手紙^を ^おま^まの^手紙^を

うとく、それを靴に入れるのをやめたのでし

た。

私はあの^おま^まの^手紙^をあ^らわ^せた^らし^ん、靴をあげることは

でま^{はし}な^いいと信じ^てま^いる。ま^いる^かそれ以上の

事が起る^かはま^いる^かつらと信じます。縁おゆか

りでしよ。彼はフワフワと弱々しい男です。

だが、やはり私は彼^とま^いる^かにも向^き合^いか^う

とは思^いま^いせん。ま^いる^かで、私は場^にト^ン

ネルを^つら^つてお^りま^した^か、無^論くま^い

ま^いる^かでし^よん。ま^いる^かもし私^が氣^を張^つて

い^なか^つた^ら、私^は一^切は^事を^放棄^して、逃^げ

が^出した^らと^して^しよ^う。

私^が振^りつ^づけ^てつ^ら同^じ、ま^いる^か私^の背^中

を、誰かが探^{いっ}いてゐるよゝを感^{かん}じかしました。

私はずつとそれが、ただ土の落^おつてあつた

めだと思つてゐました。だが、私が王冠^のの近^か

わびくはつれて、氣^きざり考^{かん}えはまちがつて

いふたのでした。そして私がいよいよ王冠^を

空^{から}きとめ、その後^{あと}に指^{ゆび}をかけて引き出した時、

ちんちんというぬぼき聲^{こゑ}が、うしろから聞^きえま

した。——おお、その指^{ゆび}がなぬぼしげな聲^{こゑ}

！ しかも ~~お~~恐^{おそ}ろしげな威嚇^{いこく}する調子^{てうし}もまじ

つてゐるのです。発見^{はっけん}のよろこびは、

あつたま
そこ

われ——たちまち消え去ってしまひました。4

ええ大
し秋が ~~まはる~~ 馬鹿でなつたら、秋は王冠

をいかに戻して、喜ぶて帰つた筈で ~~した~~。だが、

秋はそうしなつたのでした。

その水がさきも、空を恐ろしむつたのです、

秋は頭合のいホテルへ帰るには、まぶたつふ

り時向があつたので、まあ秋はトンネルをふ

さぎ、振つた跡をのくしにわたりました。そ

の向もつと、ぼは秋の仕事に邪魔たてを

しました。—— ~~秋~~ ^秋 ~~あつた~~ ^{あつた} 方に、彼の姿が見

え ^る 知れない。見えな^い 知れない。

それは彼の思^うままなので。彼はそこ^の

ま^で。だが、彼はあ^の方^の目を^おそ^ろす^や。

る力をとっているのだ。

まあ、それはどうでも、^の目は出^るまで

の長い間、塚のそばを^たま^りま^せん^でした。

ま^るも^ある^の ~~ま~~ ^{シーパロウ} ^{行きの} ^{ジャンクシヨウ} 連続停車場 ~~ま~~

へ ^の 駆け込み、汽車で^の帰^るま^まさん。 ^の つかて

あ^かる^くな^りま^さん^が、 ^の どう電

これはいい ^の か、お^りは^あめ^りま^りん^でし

ら。道にはゆきも根や、ほりえにいたの

ちりや、公園の柵がついていました。これ

が一種の潜伏場所にもなるわけですね。私は一

秋だつて落つていゝん氣持では有りませんでした。

やがて、私は、働かずに出かける人たちに出

くわしはじめました。彼等はみよ、いびくふ

しきそつれ、私を振り返りませんでした。彼等は

えんやい朝早く人を見かけたこと、
~~あつた~~

らしいので、~~あつた~~だが私はそつたとはやはり考

えませんでした。今もそつたとは考へていま

せん。といふのは、彼等の視線は、正しく私に
 こそおれつゝのではありません。え
 え、汽車に乗る時の、赤帽だつてそつでしん。
 ホーケーア

しかも、驛夫は、私の客車にはいつたあと、
 ドアを開けたのです——
 言もつたのんか
 参るで、誰かほか

の空を空を空にするために開けるように、ぬ。

かお、それは私の妄想ではないことを、信じ
 て頂けるでしょう。と、羨望パクストンは、

氣のない笑いを漏らし、口だから、

たとえ私が王冠を、もとの場飾りもどくても、

あの男は私を許さなうでしよ。 珍重さう言
~~え~~まを。 げんとし、二週間も前までは、私
 は幸福な人間だったのですが——は——彼は、
 グタリと椅子によつて、シクシク泣き出しな
 のでしよ。

私たちは言うべき言葉を知りませんでしよが、
 ちんとかこの若者を扱つてやりぬばなうとい
 と感じました。 で、さうするは——空いた
 だ一事——もし彼が王冠をもとの場所に返え
 ず氣持であらうか、助カしてやううと言いま

した。秘の話を聞いた以上、こゝろすゝこと
 が正しいと言わねばなりません。もしこゝろし
 た恐るべき結果が、彼の身の上を生じたこと
 となり、この王冠は、王冠元来の観念——
 いかし海岸の侵入者を防いだといふ不可思議
 な力の在りか、
 眞実そこに残つてゐるので
 はないでしよか？
 すくなくともこれか私
 の感情で、ロングもまゝさうだつたと思つて
 います。

ハクストン、
 とにかく、
 私たちの御告

さようろくんで受け完れまへん。いつおたは

着手しよるか？ 時向は十時半近くでしん。

~~まふまふ~~
~~まふまふ~~
旅館の人達へ怪しまれ

ないよ、うまく口実をつけて、ろんをいお

そく散散れ出ることかできましたよるか？

おたは空心の事をいめらのを筆して見まし

た。~~おたは~~ ^{おたは} 満月——^{ハースカル・ムーン} 復活の月が輝いてい

ました。ロンカは旅館の靴履きをひきとめ

て、うまく ^{あふめ込め} ~~靴履きをひきとめ~~ と読みました。

彼は靴履き、これの散散れ出ること、^{あふめ} 時向

ほとんどのいづもりだと言ひ、もし興に乗じて
 まさしく長く外で夢をぶらついたら、寤れに待
 ちうけ^{あつた}てくれるお前、決して損はかけない

と言ひました。私たちはこの旅館のいい常客

であり、ひどい面倒をわけたこともなく、ま

た雇人たちにおきまり以下のチップもやっ大

こともなかつたのでした。たぬら靴磨きも、

^{うまうまと}
 まるめ込まれて、海岸へ出してくれました。

後、帰つたところでは、彼はあつと私たちを

見送つてくれたのださうです。

パークストンは、腕に大きな外套を抱えてい
ました。雲肩の下に、王冠をくるんで
のびました。

私たちは、このふしぎな使節が、ど

んまい多く困難を伴っているものであつた

考える暇もなく、すぐさま出かけました。

はい

はくの野をごく簡単に手短かの旅ではあるが、

特に話し^てました。というのは、
山実
高の使節使

際、計画を立てる^る実行に移すという、火急

のやり方でした。

口鼻と近い道は、あや兵士のぼつて、教令

のほ左池を迂りぬけることわざ。と

旅の道 ^に ちよつ

と付人で、二つ方を見あげ

見おろした時、バクストンは ^い 言った。あたりには

人 ^つ 子一人

は ~~い~~ いませんでしん——まつたく人 ^つ 子一

人 ^つ 子 ^つ 子 即ちおれのシーバロウは、實に ^閑 静な

場所 ^{ちよ} でしん。

口あの田舎家のそばの、 ^堀 溝がたいに行くの

はいけませんよ。犬がいますから。と ^と ねが、

まっすい ^ま 進んで二つの野原を横切 ^る

方が近道ではあるまいかと指さした時、まき
パクションはこゝろ言いました。

これはもつともなことでした。で、私たち

は、教舎のほうへ道をとり、^{踵を返して}門をくぐ
りまし

ました。白状しますと、私はこの時、誰か

われわれの仕事を驚嘆がつけらよくな人間

が、数人その地びたに腹人はいになつてい

るようにならぬ事したのでした。もしこれか

らば、^{あつて}いつていらいとらら、彼等の^{胸の}驚嘆

にまつ、^{あなた}私たちの行動を監視してゐるよう

至人物に、御等は氣づいていた筈です。だが、

御等は人のまゝ振られ認められま~~す~~。とは

（せんせい）

いふものの、よく観察して、ほつの場合には

（ので）

いふ、その時はそつたつたと感じたす。特に、

苗圃地~~（？）~~を通つて、高い垣根のせはめられ

つゝ谷底のつた道へ、
神を念じ~~（？）~~ら

け出た時、そつたつたと感じたのでよ。

こゝろ三人は、ひろやめを野つ原へ出た

のでいながら、新~~（？）~~は、よし一まゆさまん出た~~（？）~~

しつと、垣根~~（？）~~、もし誰かかゝる

にいつたか目で見ることができたでしょう。垣

根の本戸を一つニつ越えるとき、左方に曲る横

道があつて、その道はあの^塚の端にある高み

へのぼるようになつていゝのでした。

その高みへ近かつた時、ロングと私は、

奴なものを感じました。それは^人臆と

の姿——遊霊と呼ぶよりほめはそれもの

——で、おたちを待ち受けていゝらしくもあ

り、且つその一つはすつとハッキリいふ姿で、

おたちについて来るかといひました。

Longo

このあいだ絶えず動揺していきパクストン

の様子は、充分描写することができまいくら

いです。彼は狩りまわらぬ獣の如く

影を落とす
息を止めてしまし

た。彼の顔を見ることはできず、

いよいよ目的の場所に着いて、彼がどうやり

違がるかは、心配するに及びませんでしえ。

彼は王冠を埋め返すは事案が、困難ではな

いと、いかに
い *多量に* 確信してゐるのしめつたのでせう。ま

たそれは困難ではなかつたのです。

まったく、おぼ見れぬこともないほどの穴進

のりの瓦で、彼は縁の側面である、目むす

一點へ疵ひかかり、そこへ穴をうが^{たまし}た。た

たまちのうちは彼のからだの大部分は穴には

いつで見えなく^{りまし}な^た。

私とロンダは立つたまま、彼の外套と^{ハン}

カチにくるんである王冠をもち、^{空際}か^そお

そるあたりを見まわしていましん。あたりに

はなれも認められませんでした。後方には暗

い椋の木の影が、^月空を^{黒く}区切つていましん。右

手車^半マイルばかりの距離には、更け多くの樹

々と教會堂の塔、左手の地平線には田舎家と

風車、前方には死んだように静かな海、それ

と私たちの間には月光をうけて肉めく塘があ

り、そのおきの一軒の田舎家は、犬^{かのすのん}吠え

ておきました。新月は多量道^{たうみち}海を照えて進み

つつありました。私たちの頭上^{あたまの上}雲を散らして

いる楳の葦りと前方の海とは、永遠のさざ

やきをうたっています。だが、このシーンといた

ちあり、~~夢~~華鈕にくくられた犬^{いぬ}のよう

か
逃がせようとする
いづれか
静かな海を照らす

衣にかゆえつけられ、た敵意の鋭い辛辣な自覚

が、おたちに由ね常へ強くなりましん。

パクス トンは穴から身を引き出し、
おた うしろさま

ちの方へ片手を差し伸しましん。

「それをください。」彼はささやきましん。「そ

れをほどいて。」

おたちはハンカチを引きのけて、王冠を渡

しましん。彼がひつ掴んだ時、月光はそれを

キラリとさしましん。おは金庫の部分には前 その

れませんでしん。そして おは 王冠

が同じものであると思つたのでした。^{まっぢ}

フおいてパクストンは、穴から出て来ると、

血のためを出して、両手で、いそがしく

土をすくい入れました。でも彼は私たち^の手

を借りるとはしませんでした。こゝろは穴を

おひらきしよつて元どおりにする仕事か、た

しぬに一時時間のためか、仕事でした。だが

——ど美人なふつにやつたか知らまいが——彼

はこの仕事をみごとくやつてのけたのでした。

もくもくといつていふの
髪をまとって、彼は足場を築き、
私たちはすいそ

まじきめえす。くとしまけん。

丘のり二百ヤードばかり来た時、ロングは

ふと驚いた。ついでに、パクストーンへ

けまけん。

曰やあ、君はあま〜外套を忘れたな。

いっはい
あんなよ。ねえ？

そう聞けば私もたしかに見たのです——長

い ~~黒い~~ 外套がパクストーンネルのそばに ~~黒い~~ いたままに

なつてたのを。

パクストーンは、だが足をとめませんでけん。彼

はまた頭を振つただけで、腕にかけた外套を

さし^{ツケ}戻しました。そして私たち夫婦といつしよ

りあつた時、彼は心づきに^{んびもな}な~~ま~~まを~~ま~~ま~~あ~~あ

^いよろい、平然とく言いました。

曰あそこにあつた外套は、私のレヤあなか

つたのでよ。

そして實際の話ですが、^{も一度}私たちが振り返つ

て見た時は、あの黒い外套はなくなつてい

ました。

さて私たちは、道^踏まに出る足早やん帰金

るための覚悟のところへ

いつきまへん。旅館に^{着いた}たのは、^朝美十二

時前で、ロングと私は、ほんとい敬告いほもつ、

て来いの、きかいつたつんと、言いつくろい

まへん。旅館の靴履きは、^{動きまわると}私たち

を迎えまへん。私^{たち}は旅館へはいつ、^{何時}、

彼の^{（趣味をなためる）}趣味^{（をなためる）}をなためるよ〜い話しかけまへん。

彼は吉岡の戸をしめる前、海岸のほうをも

〜一度がらが口見やつて言いまへん。

曰^{おれ}おれ^{おれ}さん^{おれ}は、多執^{おれ}の人たちと、お出あ

いふさいまへんで〜おれね？〜止


「いいや、誰にも命やしなかつたよ。ほん

とくれ。 ^{一人}遊霊にだつてぬ。」

と、おの言ひます。おはおぼえていまは

お、このおの言ひに、パクションは妻を

しとおを思ひます。

「わたしは誰か、あつた方のうしろ 

停車場の道に現れるのを思ひますと思ひまし

たぬぬ。と靴履きは言ひます。曰ども、あ

なた方は三人仰つしよだつたので、そいつ

^{おの言ひ}お悪者だとは思ひませんでしうが。」

まじまじ

まじまじ

おはまんとお合ええいいかおわりませんでし

た。ロングはただ口おやすみ。と云いました。

そ〜おれおれは、靴履き、^{あがり}燈火^{みなほ}

約束し〜、^{二階へ}

あが〜^{あが}つて行きます〜ん。

私たちの部屋へ帰ると、私たちはパクスト

ン巻に、元氣を考えを起させる。よう、大い

お力か〜ました。

口さあ、これで玉冠はちゃんとお返えしし

たわけた。と、私たちは言いました。口も〜

あのことは氣にしないかい。この言葉は、

彼は強くうなずきます。口だつて實際事

実王冠をそこぬやうなかつたのだらうな。そ

して僕たちは、あの王冠に近か^がくように向

く見ずま人回りは、決してこのことを^{漏らし}

てはならない。こう言つても、まが君は氣持

がなからぬのかね？ 僕は白状しようとは

思わないが——と、私は言つて、^{出かける}口あの全

中、僕は君の意見と——うん、^{そりかひ}

ついて^{君の}意見と、^{それのこと}同じうに

と思つたのだら。だが、帰りには、あれは結局
 ついで来たかっただけやないかぬ？　どうだね
 ？　

たしかに、ついでに来たかっただけです。

曰あな方は、方にも氣はつけられること
 はないのではありませんと、パクストンは言ひまし
 ら。曰ども、私は許されはしません。あな

方の言ひをうしろにいられることは、よくわか

サクリリツジ

ついでに。私はあさましい聖物や稿取の罪を、

まゝ負わなければならぬのです。教會で扱つ

て預けるでしよう。ええ、^罰罰を受けるのはこ
の肉體です。たしかに、今はあの人はそので
おを待ちま~~ま~~構えてい^はると思いません。だが

——

ゴツリと彼は言葉を切りました。そして感

謝するように、おたちをへ祈りかえりました。

おたちはできるだけ早く、彼を^{押し}ただめ^{て去らし}ました。

明日は^{せい}あわれわれの居間で~~おのまを~~^{送すようにと}送すようにと~~送すようにと~~送すようにと

いっしょに^{ゴルフを}送すようにやさいおと言いまし

た。^{どう}おは、ゴルフはあれ~~だ~~か、^{どう}おは

明日はその氣にやれまいと答えました。とに

かく折れたら、彼に、おまゆつきり眠つて、

明日の朝、おれれがゴルフをやつてついで、

~~折れたら~~ 部屋に來てついでいい、そして午後

はみんなで散歩に出かけよと勧めました。

彼はすまかいとすいて、

~~おまゆつきり~~
~~おれれが~~
~~ゴルフ~~
~~をやつて~~
~~ついで~~
~~いい~~
~~そして~~
~~午後~~

~~おまゆつきり~~
~~おれれが~~
~~ゴルフ~~
~~をやつて~~
~~ついで~~
~~いい~~
~~そして~~
~~午後~~

すべて低聲で答えました。

た。——折れたらが目ぬしいと答えてついで

とは、どこまでも徒らうとついでついでだ

が、まさしくまふんとついでついでついでついで

ふことも軽くするふこともできない ~~ふ~~、も
ふすつのみり覚悟してゐるといふこと。

なせ私たちが、パクストンを、御里に帰え

し、兄弟その他の保護のもとに、~~彼~~^{彼の}安全を

~~言~~^言かつんかと、言われぬ人もありましょ

うべ、事実、彼はそくしん身寄りも一人も

持つてゐなかつたのでしん。彼はくの町で

一軒の割住宅を持つてゐたのでしんが、近來

スエーデン^にしばらく移住しようといふ心

たので、~~い~~^いしん。で、住宅を片づけ、荷物を船送り

朝食の時の會つた

し、^{いよ}出發前ニ三圓向を、この旅館でブラブ

うと暮しとつたのでしん。

としかく私たちは今のところ眠れるが一高たと思ひ

ましん——私としては充分眠れませんでし

んが——^{四言}朝の様子を見つてし

ん。

リングも私も、そのおま朝が、^{美し}望み通りの四

月の朝とは、はまはたちがつてつることを感

じますん。そしてパクストーンも美ます

つりちがつてつるようれ見えますん。

「おはね、いつになく、かぎり眠れた晩と

いふに近かったでせう。

これが彼の言葉でした。しかし彼は私たちが

が豫定したようにしよとて ~~い~~ ました。 ~~ほ~~

~~と~~ ~~ど~~ ~~は~~ ~~ち~~ 朝中私たちが部屋について、それからいつしよ

い外出 ~~い~~ ました。

~~お~~ ~~と~~ ~~ろ~~ ~~ん~~ ~~ぐ~~ ~~は~~ ゴルフ・リンクへ行きました。そこ

で車中い余い午前を共にゴルフをやり、 ~~お~~ ~~そ~~ ~~の~~

く更つて帰ることになりましたよ、早目なラ

ンチ「朝食と夕食」にしました。依然として、

死の屍がパクスTONを追つてい^るんだ。

どうしたらそれが防げぬか、私にはあがり

ません。私は、彼がなにかして私たちの勢

力に、ついて来てくれるだろうと思ひました。

だが、とくとくとく^{ちんちん}な事^はい^はな^さな^いで^した[。]

旅行一文字

——私たちは、ゴルフから帰るなり、まっ

すぐ^に郊外へ行きま^した。そこでパクスTON

は、い^かに^も安^らか^らい^に読^書し^てい^また[。]

口いき敬告^の出るが、支度はいいわね?と、

リングが静か^にけま^した。口いいわね?、三

十分以内の暇に

「いいですよ」と、彼は答えました。で、

私は、まず二人が ^{着物をぬぎ} ~~着物をぬぎ~~、 ^{おふん} ~~おふん~~ 入浴し、それ

から三十分以内の暇を呼ぶと言つて置きました

た。

私がまず入浴して、それから ^{寢室の} ベッドにころ

りとそりました。十分はやり眠りました。口

ングが入浴して ^{居間} ~~新居~~ へ行つたのと、私が起き

て居間つたのは同時でした。ところみ、ハ

クストーンはそんないふいで、本だけ残つてい

圓行一字サタ

ました。彼の部屋へ行つてみたが、いません

でした。階下のどの部屋にもいませんでした。

二人は彼を呼びました。大騒音で 裏表女中が出て来まし

た。

曰おや、あなた方はもうお出ましになつた

と思つていましたよ。どう一人のお客さんは

お出ましにちりましたよ。あの方はあなたの方か、

お客さん 往來からお呼びにちる聲を聞いて、急いで走

つて出られたのです。わたしは喫茶室からの

おいて見たのですが、あなたの方の姿は見かけな

かつたのであります。でも、もう一人のお客さん

は、あの道と海岸の方へ走つていかれたので

した。

一読も^{立腹}驚きまいで、私たちは^{その}珍事を^{その}見送る道

を^{出し}駆けまゐらん——その道は、昨夜遠征した

道とは反対の方向でした。また四時にはなつ

ていまして、^{多分}今までのように暗水

てはいまのつたが、それでも日はあつて、

^{事実}なにも不安な事はありませんでした。人はあ

たりをあらわしているし、たしかに話だつて、

ふれと危害を受けたるようなことは、有り得な
かつたのでせう。

でも、われわれが駆け出した時、われわれ
の顔色が女中を驚かしたにふかいありません。

彼女が入口の段まで出て来て、指さしをから
まいます。

「コソコソでせう。その道をおいでになりました
よ。」

私たちは小石の土手のてっぺんまで駆け
のぼり、差を巻かちどまりました。そこから

道が合れていましん。一つは海岸の家邊きを

邊り、一つは着碇の低地の破おたいで、ち

よとどけが引いていたため、すつかり廣くなつ

ていましん。
~~無義~~^{とよあれ}新んちは、~~ま~~二つの道の

向のや石の上を進み、その二つの道^が二つな

から^{見ゆんぞろ}身~~ま~~よろにしましん。どろにもんど

いところでしん。そこで破おたいの方へ出ま


した。といふのは、その道が一番淋しく、本

街道~~ま~~からは目につめまいで、誰かが危實

とあかり得るよくな道^なつたためらです。

ロングは或る遠い^後方に、パクストンの姿
 を認めると言いました。まるで自分の前へい
 る人々に、合図でもくはないと思つていゝよう
 に、走りながらステッキを振つていたと言
 うのでした。私はどうも信じられませんでした。

そのうち、海の霧の一部が、非常にはやい速
 度で散つて来ました。そこに誰だかいたよ
 うです。私はこれだけしか言えませんが。

、^{の石の上へ、}そのあたり^靴をはいて走つたらしい

誰かの足跡のあるのを見ました。そしてその

足跡の前の~~足~~はの足跡が有りま~~した~~~~り~~ ~~す~~

これは靴をはいていない足跡で、ところどころ、

靴パソの中に踏み込まれ、その足跡を^{踏み}にじつ

ていたのでした。

おか、無論それは聞く人の想像におまかせ

す、~~唯一~~、唯一の執事なので。 ロング

は~~ヘトヘト~~^{ヘトヘト}で ~~執事~~ 氣力もなく有り、 新瓦ヲ二人は

足跡の~~見取~~とつなり型をとつたりす

時向も半段も持ちませんでした。そして次の

出始め来て、すべこのものをはいまったので

した。二人でできることは、急いでその足跡

を拾うだけのことでした。だが足跡はまじくと

ころどころに現われていきました。そして私た

ちが見る足跡は、^{たがひ}すべて裸足の足跡でした。

その一つは肉よりりり、かつと骨のきりわたつて

びえびえ足跡でした。

パクストンの^{三三三三}の^{三三三三}では、彼が探

しおめっていた友人たち^{三三三三}と^{三三三三}思つて、あと

を^{「すまわらう」}追つわけだ——^{私たち}それは私たちが言うには、

甚だ恐怖すべきより感ずるものさ、追つわけ

時、私は、彼が口あいつはあやれ方の目をく

らまう力をとりつていまをよじと身~~を~~いつた

言葉を、思い起しうん。そ〜と~~ま~~、うの

結~~末~~はどうかあるだろうかと、心配しうん。

それは、私が、^{今や}の結末を防ぎ得るといふ希

望をもた~~た~~あつためらひさ。そ〜と~~ま~~私

たちの雲霧の中へ駆けこんだ時、私の脳裡にま

かめいた凍い恐ろしい考えは、^{お話しす}妻~~は~~必要は~~あ~~

りません。

太陽はまぶら空に照り輝やき、そ〜と私たち

右手は川、左手は海で、ヤ石勝をぬかすの

あたりになれものをも見なかつたのでせよ。そ

れだけに却つて静気味があるかつたのでした。

私たちは今や家々を過ぎ、家々と古ぼけた園

砲塔の間の、細道に達しました。塔を過ぎる

と、そのさきは長長い間、石ころのほのめは

なれもない——家も、人も見えなれ。たれ陸

の出っ鼻蓋があるだけでせよ。それはありま

と知つてゐるでしよ。

しめし、その出っ鼻の前、田砲塔のそばに、

海に接近して

古い砲臺があることは、おぼえてゐるでしよ

伊文

う。介でもあすこには、ただコンクリートの
 基座がすこし残つていただけだと思ふ。あと
 はすつかりぼんぼい去られてしまつた、^{とつ}そ
 の頃は、場所こそ一つの廢趾だが、まぶかくな
 り残つていました。で、私たち~~は~~そこへ達~~す~~
 するなり、でき。だけ敏速に基座のてっぺんへ、
 はいのぼりまゝした。そこで息をいれ、もし
 うまく雨~~の~~暗れれば、その方の山石原を見わた
 すつれりだつたのです。~~お~~一分くらいの休ま
 なければならぬ。すくなくとも一マイル走

つたので正めらう。

私たちの前方には、まるで五人一つ見えませ

んでした。で、二人はまたあざむくやうなうき合

つて、墓座から降り、しめたなくまゝ駆け出

そうとしましん。ちやうどその時でせ。私は

一つの笑いともしつていいような聲を聞かま

した。その笑いは呼吸のない、肺のない笑

とでも言つたら、あつてももらえらうとも思

が、聞いたことな人の^のは、理解できま

い。その聲は下の方から起つて、雨の中

へおそれてしまいました。それでおいしまいです。
 私たちが基壇の壁へ、身を乗り出さうとみると、
 パクストーンは、下の方に倒れた。(こいまし)

彼が死んでいったことは、言うにも及びます。

まい。彼の足跡は、彼が砲臺の脇を走り、そ
 の角（さ）を回り曲がろうとしようとした事を示して
 います。そして、そこは疑わしいが、彼は、

そこで待ち構えていた誰かの、ひろげられた腕
 の中へまつしぐらに飛びこんだかいたまひ
 のでした。彼の口は、砂や石が一掴み押

しくまれており、嵩と頭は、めちやめちや
 へ碎のれていままう。私は彼の顔を二度見、
 気にはやれませんでした。

屍體をどうにかしなければと、二人が砲臺

から這い降りた、ちよとどその瞬間に、私は

ちは叫ぶ聲を聞きませんでした。一人の男が山砲塔

の土手を駆け降りて来たところでした。彼は

くくに駐ねしといる番人で、彼の鋭い老眼は、

霧を越しにも、なにか変事があったことを見

抜いたのでした。彼は倒れているパクストーン

を見、そのつぎの瞬間、私たちを見て、駭け
 つけたのでした。か—これが幸いで、^{もし}そ
 でなかつたら、私たちはこの恐ろしい事件
 に関係する嫌疑を、ほとんどすぬぬれること
 はできなかつたでしょう。私たちは彼は、バク
 ストンを^{いれた}~~殺害~~者として、目撃しはしなかつた
 のと認めます。彼はどうもおぼえがたいと
 思いました。

私たちは彼に頼んで、手印をつけてくれる者
 を呼びにやりました。そして^い擔架が来るまで

をい、これがわれわれの活動だと思ひます。

私はこの話を、どれほど素直まこと言つたか、わか

りません。だが、この點が大事なのです——
すなわち、

私たちがパクストーンと知己になつたのは、つ

いこの事件の一日前であること、そして、彼

がガリアム・アージヤアと呼ばれた人物の手

中に、ちやうか或る危険の懸念のもとに置かれ

ていまと、われわれに打ちあけとん、

われわれは、~~その~~の足跡のほかに、他の

数人の足跡を見たと。しかし無論、善取調

幾つたいに。パクスト
ンと近づけた時、彼

この時は、すんで砂上から消え去つていた
こと。

彼一人、幸いにも、この地方に住んでいて、

いかにする井リアム・パージャアという名目の人

も知つていませんでした。田砲塔の番人の証

言で、私たち二人はすむまの嫌疑がのがれ

ました。
陸軍審官の評決では
~~陸軍審官の評決では~~ 或る人物あるいは

知られざる人物によつて、
執拗な殺人が行わ

れたのだといふことばかりです。これが一

のま
切です。

パクス トンは、えんをわけで、すての取調

べには無関係といふことになり、しんがうて

所謂。通行止め。で通りません。そして

おは

もう二度とシーバロウは、行きもせず、近

か寄りもしないでい